

# 小中連携教育の事例研究

— カリキュラム・指導方法・交流活動の観点から —

田 代 裕 一

Collaborative Education between Primary Schools and  
Junior High School :

From the View Points of Curriculum, Teaching Method,  
and Interaction

Yuichi Tashiro

## I 本研究の目的・対象・方法

小中一貫校（義務教育学校）の増加など、小中連携教育については今後、益々、促進されることが予想される。このような教育状況を踏まえて、本研究では、G 県 E 市で行われた小中連携教育の取り組みの事例について、カリキュラム・指導方法・交流活動の観点から検討することを目的とする。今回、研究対象とする連携教育は、最近、増えてきた小中一貫校とは異なり、1 中学校と 3 小学校という、連携が困難な条件のもとでなされたものである。しかし、一つの中学に複数の小学校から進学していることが多いという、学校教育の現状からみれば、むしろ一般的な事例であるといえよう。

E 市教育委員会は、小中連携教育の推進を重点課題とし、平成 20 年に全市で小中連携の取組が実施されることを目指して、平成 18 年度から① I 小中学校、② D 中学校ブロック、③小中連携モデル校等での小中連携事業を実施した。（以下は、D 中学校の研究要録 2007…詳しくは後述、における記述を基にまとめている。）

このうち、本稿で検討するのは、② D 中学校ブロックでの取り組みである。

このD中学校ブロックへの研究委嘱の目的は次の3点であった。

- 1 小学校と中学校が児童生徒の実態や指導の現状について交流し、相互理解を図りながら、9年間のカリキュラムについて検討する。
- 2 1中学校へ入学する3小学校の児童の学力や生活の実態を小学校間で共通理解し、取り組んでおくべき内容を明らかにする。
- 3 教師の専門性や個性を活用する校種を越えた指導や児童生徒の合同授業など、カリキュラムを基にした具体的な実践を行い、その可能性と成果を明らかにする。

この連携事業は2006・2007年度のもので、特に教育課程の面では以前の学習指導要領に基づいており、現在の学校現場にそのまま適応できない点もある。しかし、この取り組みは、2008年度からの学力重視に学校教育が切り替わる前の、「ゆとり」がまだしもあった時期のものであるがゆえに、1中学校+3小学校という連携の困難な条件においても実施できたと思われるのである。実際、このときの各種の連携活動の研究をもとにE市は、平成21年にE市小中連携教育指針を出し現在に至っている。

具体的な検討の対象はこの4校が連携の取り組みについてそれぞれ刊行した、以下の研究要録である。

- ①平成18・19年度E市教育委員会「小中連携教育」研究委嘱 研究発表会要録 研究主題「学ぶ意欲」と「豊かな感性」を身に付けた児童生徒の育成を図る小・中連携教育の創造 ～小中のカリキュラム・アーティキュレーションを図る教育課程の工夫を通して  
重点課題 A小学校 「豊かな心を育てる教育活動の研究 ～人とのかかわりを通して～」2007年…本文中では「要録A」と記している。以下同様。
- ②\*研究主題は1)と同じなので省略する。以下の③、④についても同様。  
重点課題 B小学校 「自己と他者の相互理解を目指した話すこと・聞くことの指導法の工夫 ～国語科と生活科・総合的な学習の時間との関連を通して～」2007年…「要録B」。
- ③重点課題 C小学校 「豊かな思考力・表現力を育てる国語科学習の研究 ～9年間の目標・内容の系統性をもとにゆるやかな接続をめざして手立ての

工夫を取り入れて～」2007年…「要録C」。

④重点課題 D 中学校 「小中のよさを踏まえた教育活動の充実」2007年  
…「要録D」

このように、4校全体で『学ぶ意欲』と『豊かな感性』を身に付けた児童生徒の育成を図る小中連携教育の創造～小中のカリキュラム・アーティキュレーションを図る教育課程の工夫を通して～」という共通テーマが設定され、さらに各校ごとに重点課題が副題として付けられている。なお、ここでいうキュラム・アーティキュレーションとは、小中学校間にあるカリキュラムの隙間や接続のことである

本研究では小中の要録を関連的に検討して、連携の実態や意義・課題について明らかにする。なお、筆者は、本連携教育に関する研究発表会（2007年10月17日）に参加して、連携活動の実際を観察している。

## II 研究対象校の連携活動の概要

この事業では連携活動として以下の3つのタイプが設定されている。

- やわらかな接続 交流・相互理解 …本論文では「交流活動」と表現する。
- なめらかな接続 指導方法の工夫・改善 …同じく、「指導方法」と表現する。
- なだらかな接続 教育課程の系統化 「系統表」の作成 …同じく、「カリキュラム」と表現する。

研究組織として、「学ぶ意欲」部会（言語部会・数理部会・社会生活部会・体育部会）、「豊かな感性」部会（学校行事部会・芸術部会・総合部会・道徳・生徒指導部会）が設定されている。

本事業の研究仮説は以下の通りである。

小中の特徴やよさを踏まえて実践的にカリキュラム・アーティキュレーションを図ることにより、教育課程を工夫してそれぞれの教育活動を充実させ、小中連携教育を創造していけば、「学ぶ意欲」と「豊かな感性」を身に付けた生徒の育成が図られるであろう。

指導方法の観点に関しては、小学校4年生へのTT授業から中学校3年生と

小学校6年生の合同授業まで、幅広く多様な授業の実践が試みられている。全教科・全教育活動において取り組まれているが、特に、中学校では、「選択教科」での授業の時間が連携活動に充てられていた。

連携授業・行事の種類は以下の通りである。

- ①小中連携行事
- ②出前授業（小学校教師・中学校教師）
- ③TT授業（小学校教師と中学校教師で）
- ④合同授業（小中学生が合同で）
- ⑤交流授業（中学生が小学校にゲストで）
- ⑥連携授業（連携した内容を各学校で）

連携研究の進め方として、まず、小中の教職員の研修や互いの学校・校種の参観を行っている（「交流活動」）。そこから、小中学校の実態に応じて、各教科等で小中連携の教育活動を検討している。

（これらは、要録D 1～42頁 およびその前文…教育員会挨拶 による）。

以下、本連携活動の設定に対する筆者のコメントを記しておく。

- ・小学校の重点課題に、豊かな心や思考力、相互理解といった、認知面と情意面の双方にかかわるテーマが多かったので、全体テーマを「学ぶ意欲」と「豊かな感性」にまとめたと思われる。
- ・事業を進める組織が設定されているが、「学習意欲」が国語や算数の教科で、「豊かな感性」が行事や音楽、道徳で、といった分け方は、やや図式的な感もある。例えば、国語の物語文の読解などは、豊かな「感性」の育成にも通じているのである。ただ、これは現実的対応としてやむをえない面がある。
- ・カリキュラム・アーティキュレーションが本事業のキーワード（中心概念）になっているが、カリキュラムだけでなく、授業の改善や小中の相互理解を進める、といったように「多様な活動」が想定されている。
- ・各学校の課題や実態を踏まえて、できるところから取り組みを始めるといったように、プラグマティックに取り組まれている。
- ・各教科・領域ごとに、小中相互で話し合い、課題を把握し、授業参観を行い、そこから実現可能な連携を探るという、漸進的な取り組みになっている。

- ・小中のカリキュラムの系統表を作った教科や、授業参観・情報交換が主であった教科など、各教科等で連携活動の程度にかなり差がある。

### Ⅲ 連携活動の実際

次に各教科等において細かく小中連携の実態を見ていく。連携が精力的に行われて、その取り組みの実態や意義がよくわかる教科等（国語、音楽科、総合的な学習、特別活動）については、連携活動を整理した一覧表を作成して検討した。それ以外の教科等は、簡単なまとめ及び検討を行った。なお、以下、下線は筆者によるもので、連携に関して重要と思われる箇所に引いている。表の後に、筆者のコメントを加えている。

#### 1 国語科

##### D 中学校

|  |
|--|
| 1 小中連携の視点  |
| <p>①小中の授業を参観し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・授業における児童生徒の様子の違いや、授業展開の違いが明らかになった。</li> <li>・小学校では、話し合いや意見交流の時間が十分に確保されている。</li> <li>・中学校では、スピーチや個々の生徒の意見発表の時間が多い。</li> <li>・小学校で、活発に意見交換するような児童たちが、中学生になり、授業中に自然と意見を発しないようになっていった。</li> <li>・中学校の課題…個々の生徒が意見交換をしながら、考えを深めていけるようにする（学習活動中に、意図的に、生徒達同士が意見交換できる場面を作り、生徒が考えを深める場を設定する）。</li> </ul> |
| 2 具体的な取り組み（B小学校・C小学校と連携活動）   |
| <p>(1) 平成18年度の取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○C小学校の1年生「くじらぐも」の授業を参観</li> <li>○B小学校における「話す・聞く」活動と連携</li> <li>・「話すこと・聞くこと・話し合うこと」に関して各学年で目標を設定した「系統表」を作り、項目をあげて、具体的に記述していた。</li> </ul>  |

- ・この表をもとに、D 中学校の目標も明らかにして記載した。
- ・この表によって、小学校で学んできたことを、中学校側も意識でき、それらの内容をもとに発展させた授業展開が可能になった。
- ・小学校で習得すべき力が不十分であったとき、それを補う学習指導が中学でできる。…系統的な取組を意識できる。
- ・B 小学校は、「話し方・聞き方」のポイントをまとめた共通の掲示物も作成していた。
- ・この掲示物は、3 小学校で掲示して、中学校の学習に生かせるようにする。

## (2) 平成 19 年度の取り組み

### ○中学校 2 年生の授業参観 教材「ゼブラ」(文学的教材)

- ・中学校 2 年生の文学的教材「雨の日と青い鳥」を用いて小中の勉強会を開催した。

## 3 今後の連携に向けて

### ○成果

- ・中学校側…生徒は小学校で何を学んできているのかを理解することで、発展的に学習を進めることができる。
- ・生徒達同士の意見交流を念頭に置いた授業を展開することで、発展的に学習を進めていける。 →学習意欲の向上につながっている。

### ○課題

- ・「話す・聞く」「読む」だけでなく、「書く」「言語事項」においても、小中で系統性をもって取り組んでいく必要がある。
- ・授業の中での生徒同士の効果的な意見交流は、話し合いをさせる中においても、一人一人の考えを深めていくためにも重要である。

(要録 D 18～19 頁)

## B 小学校

### ○重点課題

「自己と他者の相互理解を目指した話すこと・聞くことの指導法の工夫  
～ 国語科と生活科・総合的な学習の時間との関連を通して ～」

|  |
|--|
| ○研究目標  |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・小中9年間の国語科の話すこと・聞くことの力の系統表を作成し、それに基づいた授業実践を行い、話すこと、聞くことの力を高める。</li> <li>・国語科と生活科・総合的な学習の時間との関連を考えた年間計画を作成し、国語科の話すこと・聞くことの力を生活科・総合的な学習の時間のどこの場でどのように運用するか、その方策を明らかにする。</li> <li>・自己と他者の相互理解を目指すための支援のあり方を明らかにする。</li> </ul>                  |
| ○今後の連携に向けて   |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・国語科の音声言語単元では、系統表に基づいて、低学年から系統的に指導するスタートを切ることができた。今後、全部の学級で系統的な指導を続けていかなければ本当の成果は表われないと考える。</li> <li>・話すこと・聞くこと・話し合うことは、児童生徒が主体的に学習に取り組むために重要な力の一つである。そして、この主体的な取り組みが、学ぶ意欲を高めることにつながると考える。これらの能力を高めながら、学ぶ意欲にどのようにつながるのか、探っていきたい。</li> </ul> |

(要録 B 29 頁)

## C 小学校

|  |
|--|
| ○重点課題  |
| 「豊かな思考力・表現力を育てる国語科学習の研究 ～9年間の目標・内容の系統性をもとに、ゆるやかな接続をめざした手だての工夫を取り入れて～」  |
| ○研究の成果と課題  |
| <p>(1) 研究の成果</p> <p>①小中学校における目標及び内容の分析・構造化の視点から</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「ゆるやかに接続するための小学校各学年における指導のポイント」を系統的に作成し、さらに「カリキュラム・アーティキュレーションを図った物語文の読みの重点」を整理したことにより、各学年のねらい、読み方の基本が明らかになった。</li> <li>・9年間を見通し、各学年の重点を見据えた系統的計画的な実践への意識</li> </ul> |

が高まった。

- ・今まで以上に確かな力として子ども達に身に付けさせ、次の学年に進級させることが可能となった。

### ②授業実践を通した小中の教師の情報交流

- ・中学校教諭との情報交流や授業参観と協議会、中学校生徒へのアンケートが、小学校での授業づくりの参考になった。
- ・小学校は中学校から教材解釈の手がかりを得ることができ、中学校は小学校から指導方法の手がかりを得ることができた。

### ③単元目標の具体化・重点化から

- ・教育のねらいにそった、その学年の重点をしっかりと見据えた教材研究や単元の構成を図ることができた。
- ・自分たちの取り組みの位置付けや手立ての意義が明確になり、学習活動の充実につながった。

## (2) 研究の課題

- ①文学的文章だけでなく、説明的文章においても「ゆるやかに接続するための小学校各学年における指導のポイント」を充実させ、確実な力の育成を図る。
- ②「工夫改善の観点」を踏まえたことによる児童生徒の変容を把握しながら、情報交流、授業参観と協議会を継続していく必要がある。
- ③年間を通しての系統的な指導を今後一層明らかにしていくとともに、教師一人一人の授業力を一層高めていく必要がある。また、3小学校間の連携を充実させ、D中学校ブロックにおける学習過程や指導内容、指導方法を検討し確立していく必要がある。

(要録C 8頁)

- ・小中で相互に授業参観を行い、丁寧に子どもの様子を見ている。
- ・中学校に進学した生徒にアンケートをとって、(特に小学校の)課題を確認している。
- ・小学校2校が国語において重点課題を設定していたことあり、「聞く・話す」と「読む」の分野で小中の系統表が作成されるなど、教育課程の面で充実し



た取り組みがなされている。

- ・これらの系統表によって学年の重点が把握でき、取り組みの位置づけや手立ての意義が明確になっている。
- ・授業に関しても研修を熱心に行っている。特に中学校側が小学校の授業のよさ（子どもが意見交換を十分に行っている、考えを深めている）に学んで、取り入れようとしている。
- ・小学校は中学校の教材研究の深さに学ぶ点があるとしている。
- ・D中学校ブロック全体での授業の充実のためには、3小学校での連携が重要であることが小学校側から指摘されている。

## 2 社会科

D 中学校

(要録 D 19～20 頁)

- ・D 中学校と 3 小学校との連携活動が行われた。
- ・「人権教育」に焦点をおいた連携活動を行っている。
- ・「人権教育」の情報や資料の交換を主に行っている。
- ・E 市教育委員会「社会科学習における部落問題学習指導事例集」をもとに小中学校の社会科学教科書における「人権学習」の記述内容について研修し、お互いに公開人権学習を見学している。
- ・D 中学校要録には詳しく記されていたが、小学校の側にはこの社会科に関する記述はみられなかった。
- ・研究発表会では、D 中学校の 1 年生 選択社会「歴史家になろう」と、2 年生社会「世界の国々を調べよう」の 2 つが設定されていた。「歴史家になろう」の指導案には小学校での学びを踏まえた指導観が記されている。

## 3 数学科 (算数)

D 中学校

(要録 D 19～20 頁)

A 小学校

(要録 A 26～27 頁)

- ・D 中学校と A 小学校との連携活動が行われた。
- ・中学生の実態から、小学校で学んでいる分数、小数、割合の理解が十分でな

いことが示されている。

- ・小学校で習い終えて、中学校で小学校の学習を基に応用する単位に関しては、特に小学校での習熟をはかっておくことが大事として、小学校で重点的に指導すべき箇所が明確にされている。
- ・指導方法の工夫や改善をするために、小中の授業を見合うことから連携を始めている。
- ・A小学校の先生をT2に位置づけたD中学校でのTT授業が、研究発表会（2007年10月17日）も含めて6回行われている。計画づくりやうち合わせ、教材研究なども9回行われている。このようにTT授業が積極的に実施されている。
- ・中学校の選択数学の時間に、小学校の指導方法工夫改善担当がT2として授業に入っている。
- ・TT授業では小学校の「教材の工夫やきめ細かい指導」や中学校の「教科の専門性」を実践の中で生かすことを試みており、双方のよさを取り入れようとしている。
- ・TT授業は全て中学校でのものであり、その意味で、やや一方向的な連携になっていた面もある。しかし、A小学校の記述に、小学校の子どもと中学校の生徒の実態がわかり、教師間で交流しながら一緒に教材研究できたと記してあり、小学校教師の研修として充実していたことが伺われる。
- ・小学校教師がT2として操作活動や教具の準備、掲示物・黒板用プリントの準備を丁寧に行っているが、この丁寧な指導が中学校の授業でも必要だということが中学校側に認識されている。

#### 4 理科

D 中学校

(要録 D 22 頁～24 頁)

- ・D中学校とB小学校、C小学校との連携活動が行われた。
- ・最初の段階で、各学校の理科の実験室を見合っ、て、教具（顕微鏡など）の違いを具体的に理解している。これは合同授業の可能性を探るうえで非常に意義があったといえる。

- ・合同授業に中学生も「サポーター役」をかねて参加しているが、これは小学生が中学生の学習活動を直接、見たり、子どもどうしてコミュニケーションをとったりすることができ、意義があった。
- ・「理科ぎらい」「理科ばなれ」の課題を解決するため、中学校の理科室で、実験を用いて、小学生へのTT授業（体積の変化…B小学校4年生）、合同授業（植物の葉と日光…C小学校6年生）を行っているが、特に後者では中学校の高倍率の顕微鏡を用いて緻密な観察が可能になっている。
- ・学習内容を先取りすることによる「学ぶ時の新鮮さや驚きをなくす危険性」が中学校から指摘されている。この指摘は、小中連携の際に陥りやすい問題を示したものであり、貴重である。

## 5 音楽科

### D 中学校

|  |
|--|
| 1 小中連携の視点  |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・小学校教師との部会で「小中で共通して取り組める身近なもの」を探すために、双方の教科書を見合った。</li> <li>・その際に、「この曲は小学校でも中学校でも取り扱う」などの気付きや質問・意見を出し合った。</li> <li>・中学校側から「このことは<u>3小学校とも必ず指導しておいて欲しい</u>」ということを率直に伝えながら連携を進めた。</li> </ul>   |
| 2 具体的な取り組み（3小学校と連携活動）  |
| <p>(1) 平成18年度</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○10月 合唱コンクールに向けての放課後練習の公開（1週間） <ul style="list-style-type: none"> <li>・<u>小学校卒業後、生徒たちと久しぶりの再会になった小学校教師もいた。</u></li> </ul> </li> <li>○11月 出前授業 <ul style="list-style-type: none"> <li>〈対象〉A小学校4・5・6年生 C小学校5年生</li> <li>〈題材〉各学年の合唱指導</li> <li>〈教材〉小学校の文化発表会や区の音楽会で発表する曲</li> <li>〈授業の流れ〉小学校の演奏を聴いて課題を見付け、指導のポイントを絞</li> </ul> </li> </ul> |

り、アドバイスをしながら課題をクリアしていく。

○小中合同研修

- ・小学校4～6年と中学校1年生の教科書を比べて、教材や内容の共通性を探る。
- ・小学校5年生「BELIEVE」、小学校6年生「翼をください」は、中学校1年生の教科書にも掲載されており、演奏形態は異なるが調べは同じことから、合同授業の可能性が広がった。
- ・小学校教師から、苦手意識があるにもかかわらず「教科書に掲載されている楽典を全て指導して中学校に進学させる」ことに悩んでいるとの相談があった。必ず、共通して理解しておいた方が中学校での学習がスムーズであることを提示した。

(2) 平成19年度

○1学期、出前授業→合同授業

- ・B小学校の6年生に出前授業。その後、特に、中学校との交流を深める予定である6年2組と、中学校3年生選択授業の生徒とで合同授業を行った。

3 今後の連携に向けて

○成果

- ・合唱の表現技能の向上
- ・音楽への関心・意欲の高まり
- ・中学校教師への親しみと期待

○課題

- ・「感受」に関しての継続的な連携のあり方
- ・カリキュラムや指導法の共通性・系統性

(要録D 24頁～27頁)

A 小学校

1 小中連携の視点

- ・小学校側に音楽の表現の技能に関して指導がうまくできないという悩みがあった。

|   |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・小学校側から中学校の音楽の先生に、専門性を生かした指導をお願いした。</li> </ul>   |
| <p>2 具体的な取り組み</p> <p>(S区音楽会に向けて)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○実践例 5年「つばさをだいて」 気持ちを歌声にのせて</li> <li>○歌詞のもつリズムと旋律の関係を味わって、気持ちを込めて歌う。</li> <li>○旋律の動きや旋律どうしの重なりを感じ取って、響きのある歌声で歌う。</li> </ul>   |
| <p>3 今後の連携に向けて</p> <p>○成果</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・F先生が範唱されると、その歌声に近づきたいという子どもたちの思いが強くなり、1時間の中で響きのある声量で歌うことができるようになった。</li> <li>・子どもたちはお互いの声を聞き合って、ポイントとなる箇所がくると、丁寧に気をつけて歌っていた。</li> <li>・子どもたちが自分の歌声に自信を持った。</li> <li>・音楽会当日、F先生に聴きにきて頂き、子どもたちも張り切って歌うことができた。</li> <li>・中学校に進学してF先生の指導が受けられることを楽しみにしている子どもが多い。</li> </ul> <p>○課題</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・中学校の先生が来校して音楽の学習を組むという、カリキュラムの編成は、中学校側に負担がかかるために、カリキュラムの編成のあり方を工夫していく必要がある。</li> </ul> |

(要録B 28頁)

## B 小学校

|  |
|--|
| <p>(音楽出前授業)</p>  |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・研究発表会のアトラクションで小学校6年生と中学校1年生の合唱が設定された。この合唱曲の一つとして、両方の教科書にある歌「ビリーブ」の練習を行った。</li> </ul> |

- ・1回目は中学校の音楽科の教師が小学校6年生に声の出し方を中心に出前授業を行った。児童はやや緊張しながらも、中学校教師の専門的な指導や巧みな話術で歌の練習に意欲的に取り組み、合唱の練習を行った。さらに、発展として「千の風にとって」の合唱の練習も行った。

(要録 B 28～29 頁)

- ・初めにコンクールにむけての中学校の合唱練習を参観するなど、気楽な形で取り組みを始めている。
- ・その一方、小中の教科書の丁寧な検討を行い、共通する題材を把握している。
- ・小学校教師の切実な課題（合唱指導）を中学校教師が聞き、対応することで必然性の高い連携ができています。
- ・音楽（合唱）は多くの児童生徒が参加できるので、学年全体で行う授業に向いていた。
- ・中学校教師の歌唱や中学生の合唱のレベルが高く、小学生の目指す目標になり得ている。
- ・小学校で押さえておくべき内容が中学校教師から示されている。
- ・D 中学校の音楽科の教師は F 先生一人であると思われるが、全小学校と連携活動を行うなど、精力的な活動を行っていた。この教師は小学校の合唱の発表会にも参加するなど、児童への関わりが多くみられた。
- ・短時間の指導でも、合唱のレベルが向上した。A 小学校側の記述からも D 中学校の音楽指導が効果的であったことが伺える。
- ・地区の音楽会や、研究発表会の場での合唱など、小学校の側に合唱の質を高めようとする動機があった。
- ・中学校教師の小学校への度々の訪問など、中学校側の負担が大きかったことを小学校側が課題としている。

## 6 美術科

D 中学校 (要録 D 27～29 頁)

A 小学校 (要録 A 30～32 頁)

- ・D 中学校と A 小学校との連携活動が行われた。

- ・本連携活動では、研修会での小学校教師からポスター制作時の彩色指導について質問が出たことがきっかけとなって、具体的な取り組みが進展している。
- ・中学校教師によって、小学校の指導方法や児童の実態が具体的にとらえられている。
- ・制作しながら表現が広がっていくことを大事にすべきである小学校から、じっくり考えさせて制作することを大事にする中学校へと接続させる、といったように発達に応じた連携が考えられている。
- ・ポスター指導に関して、小学校では子どもがアイデアをたくさん出すこと、そのアイデアを吟味することが大切といった指摘が中学校側から出ている。これは、子どもの発達段階に応じた学習課題の提案であり、実効のある連携を考える上で貴重である。
- ・今回、小学生向けの指導が主であったが、小学生だけでなく、中学生も小学生の作品を見ることで刺激になり、自分たちの特徴や努力を自覚することができている。
- ・ポスター制作に関する中学校教師の指導法を、一旦、小学校の教師が聞いて児童に指導する、作品交流で児童生徒の意見を出し合う、といった活動は、物理的・時間的な制約を克服する取り組みであり、持続可能性が高い。
- ・今後の課題として、夏季休業中の作品交流が提案されているが、これも比較的、無理なく取り組める活動である。

## 7 技術・家庭科

D 中学校 (要録 D 29～31 頁)

B 小学校 (要録 B 27 頁)

- ・D 中学校と B 小学校との連携活動が行われた。
- ・研修会において小中の教科書を比較して、双方の違い（題材）と類似性（器具・道具）を確認している。
- ・基本的な調理実習など小学校でしっかり身につけさせておきたいことと、栄養に関する内容など中学校に任せてもらいたいことに関して、明確な意見が中学校側から出ている。これは、「具体的なカリキュラムの関連」に通じる

活動である。

- ・ 1回の授業参観、2回の打ち合わせ、1回のTT授業（「みそ汁づくり」…研究発表会も含めると授業は2回）と、あまり活動は多くないが、この取り組みについてB小学校側も効果的であったと記している。
- ・ 授業中に中学校の評価（皮むきテスト）と同じ活動を仕組むことによって、中学校での評価について小学生に心構えができることと述べられている。確かに、小学生は中学校での評価（テスト）を気にしているので、その意味で有効であったといえよう。ただ、あまり中学校での評価を気にしすぎると、中学校への進学が楽しいものでなくなるおそれもある。しかし今回は、楽しい活動的な授業（みそ汁づくり）の中に自然に評価が組み込まれていたため、小学生にとっても適切であったといえる。

## 8 保健体育科

D 中学校 (要録 D 31～32 頁)

B 小学校 (要録 B 26 頁)

- ・ D 中学校と B 小学校との連携活動が行われた。
- ・ 基礎体力やコミュニケーション能力を高められる交流授業（「鬼ごっこ的なゲームを取り入れたバスケットボールの練習」）を行っているが、B 小学校側の記述からも、児童の学習意欲の向上に効果的であったといえる。
- ・ 簡単なゲームを通して基礎体力の向上や集団的技能の習得を図るだけでなく、互いに協力して練習方法を教えあったりする活動に意義があった。
- ・ 特に中学生に丁寧に教えてもらったり、声をかけてもらったりしたことが中学校への児童の不安を減らすことになっている。このように、子どもたち同士の交流が自然にできるところが体育の利点であるといえる。
- ・ 授業の準備段階で、話し合いの時間が十分とれなかったという指摘が小中から出ている。
- ・ 中学校側では「新体力テスト」の実施を今後の連携の要点として提唱している。評価は指導の指標となるので、確かに重要である。ただ、一方で今回行った「鬼ごっこ的要素」など、双方が無理なく交流できる活動も行いつつ、自



然に評価も入れていくことが適切であろう。

## 9 英語科

D 中学校 (要録 D 32～34 頁)

A 小学校 (要録 A 24 頁)

C 小学校 (要録 C 72～73 頁)

- ・ D 中学校と 3 小学校との連携活動が行われた。
- ・ 4 校の交流会において、中学生が英語の歌やスピーチを行ったり、A 小学校での中学生の ESS のメンバーが英語のゲームや英語で自己紹介をしたりすることは、中学生の英語力、コミュニケーション力を小学生が実感し、中学生（の英語）に憧れを抱く契機になっている。
- ・ D 中学校と C 小学校とでフォニックス（英語中心の指導法）についての研修会を行っている。
- ・ C 小学校では 3 年生から英語活動に取り組んでおり、「英語によるコミュニケーション活動を通して、英語好きの児童・生徒を育てる小中連携の工夫」というテーマを独自に設定して、小学校の低学年から中学校までの、主なトピック、言語材料、目標を設定した一覧表を作成している。
- ・ D 中学校と A 小学校との「イソップ物語」の英語劇は小学生、中学生にとって英語の活用力を育て、英語の必然性を感じる機会になっている。
- ・ 生徒の感想から、小学校の先輩と授業で会えたことで中学校への親しみがわいていることが伺える。
- ・ 小学校 3 校でローマ字の統一プリントを作成し、定着をはかり、到達目標を設定している。このように小学校間での足並みをそろえた取り組みは意義が高い。
- ・ 小中の英語のカリキュラムは、次回の学習指導要領の改訂（小…2020 年度中…2021 年度）で大きく変わる。特に小学校では 3 年、4 年から外国語活動が始まり、5、6 年に教科「外国語」が設定されるので、今後、小中の連携は大きな課題になる。

## 10 道徳・特別活動（学級活動）

D 中学校 (要録 D 34～35 頁)

A 小学校 (要録 A 25 頁)

- ・ D 中学校と A 小学校との連携活動が行われた。
- ・ 授業研修において、この連携を行っている小学校以外の小学校教師に道徳の授業（「友情・信頼」）を行ってもらい、小中全体で参観するなど、柔軟な取り組みがなされている。
- ・ 道徳の授業や学級活動では、中学校側が小学校の授業に学ぶべき点が多い（子どもに主体的な思考を促進している、教材の工夫がある）との指摘がある。
- ・ D 中学校での、特別支援学級の子どもと交流のある学級（2 年生）に対して、A 小学校の教師が出前授業（自作教材「あずさからのメッセージ」）を行っている。これも実態に応じた柔軟な取り組みである。
- ・ 教科担任制の中学校でも、クラス担任の教師は道徳や学級活動を行っているので、この分野での連携への全体的関心が高い。

## 11 総合的な学習の時間・生活科

D 中学校

|  |
|--|
| 1 小中連携の視点  |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・ B 小学校の重点課題との連携をどのように行うかという点で、話すこと・聞くことを基本に、中学校の活動といかにつないでいくかを協議した。</li> <li>・ 小学校の総合的な学習の時間で取り組んできた「フューチャーラーニング」と、中学校で取り組んでいる「生き方」を考える学習を、“未来”をキーワードに、〈キャリア教育〉として実施する。</li> </ul> |
| 2 具体的な取り組み（B 小と連携活動）   |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・ B 小学校「未来発表会」 + D 中学校「職業体験学習発表会」（研究発表会において合同授業を実施…D 中学校体育館にて）</li> <li>・ D 中学校の 3 年生が職業体験で苦労したことや達成感を小学生に伝え、</li> </ul>  |

仕事をする事の大切さについて、意見交換をする。

- ・ B 小学校の 6 年生から、自分の夢や興味をもった職業などの話を聞き、未来をもつ大切さを知る。

### 3 今後の連携に向けて

- ・ ねらいや学習内容、評価の観点等で共通化した学習計画が必要である。その上で、中学校でさらに継続するもの、発展させるものなど見通しをもった学習をすすめたい。

(要録 D 35～37 頁)

## B 小学校

### ○生活科・総合的な学習の系統について

- ・ 生活科・総合的な学習の時間は、小中連携教育の確かな系統的なものがない。
- ・ 一つの視点としてキャリア教育を考えて実践した。「フューチャーラーニング」には自分の将来の職業について考えていくという内容があり、中学校 3 年生の職場体験の発表とつなぐことを試みた。
- ・ 今後、小中 9 年間でキャリア教育という視点で連携の可能性を探っていきたい。

### ○中学校 3 年生の職場体験 …中学校では「総合的な学習」に当たる。

- ・ 平成 19 年度は、B 小学校に D 中学校 3 年生が、職場体験として、小学校 2 年生以上の全クラスに入った。
- ・ 5 日間、児童は中学生を先生として、時には先輩として接していた。
- ・ 中学校の生徒は教師という仕事の大変さを感じながらも自分の将来の夢を確かにしていた。児童は中学生に感謝の気持ちを持ったり、自分の将来ややりたい仕事を考えている生徒に尊敬の念を持ったりしていた。

(要録 B 29 頁)

- ・ B 小学校では、「話す、聞く、話し合う力」の育成を研究の重点にしており、生活科・総合的な学習と国語（音声言語単元）との関連を意識した年間計画が丁寧に構成されている。
- ・ 合同授業について小中双方から丁寧な計画が立てられている。

- ・筆者は研究発表会において実施された合同授業を参観した。各コーナーで、5名程度の小学生が一人ひとり、画用紙に書いた自分のプレゼン用紙をもとに、丁寧に自分の将来になりたい職業について報告し、中学生や先生から質問を受けていた。中学生も4~5名のグループで、職業体験について分担して報告し、職業に関するクイズを出したりしていた。小学生も積極的に答えていた。また、小学生は中学生に中学校での勉強の仕方や評価などを質問して、中学生が答えるなど、「話すこと・聞くこと・話し合うこと」の活用場になっていた。中学生も小学生に丁寧に対応しており、社会性の育成の場としても有効だったと思われる。
- ・小学校での中学生の職業体験（教師体験）は、中学生のキャリア教育だけでなく、小学生が中学生に親しみを持つ上でも効果があったと思われる。

## 12 特別活動（行事）

### D 中学校

|   |
|---|
| 1 小中連携の視点   |
| <p>・平成18年度から、以下の目的をもって4校の学校行事の中で児童生徒の交流の計画を立て、実施した。</p> <p>①小学生が中学校の行事を体験することで、不安感をなくし、「早く中学校に入りたい」という期待感をふくらませる。</p> <p>②小中学校の児童生徒が一緒になって、共に教育活動を行うことで異年齢間の人間関係を深める。…そのために「感動」できる行事の内容を計画する。</p> |
| 2 具体的な取り組み  |
| <p>(1) 平成18年度行事での交流</p> <p>①合唱を中心とした交流会</p> <p>・3小学校の6年生を中学校体育館に招待し、合唱の交流会を行った。①3小学校がそれぞれ校歌を歌う。②合唱の表彰を受けた中学校3年生のクラスが自由曲を合唱する。③中学校3年生全員が課題曲を合唱する。④中学校3年生有志が英語の歌を歌う。</p>                            |

- ・小学校から感動したというお礼の手紙が届いた。

## ②部活動見学会

- ・D 中学校と B 小学校の運動場と体育館を使用し、3 小学校の 6 年生全員による部活動見学会を行った。

## (2) 平成 19 年度行事での交流

### ① 体育大会への参加…D 中学校

- ・体育大会で小学校招待リレーを新たに実施した。中学校の保護者向けの案内に兄弟・姉妹でリレーに出たい生徒の募集を行ったところ、希望者が多く、当初の予定を変更して、6 人 1 組で 8 チーム参加することになった。

## 3 今後の連携に向けて

### ○成果

- ・小学生は小中連携の行事に非常に積極的であった。
- ・小学生の中学校への不安を減らすことに通じた。

### ○課題

- ・中学校に小学校の子どもをよぶパターンだけだった。
- ・今後、小学校の行事に中学校の生徒が参加することで交流を深めていきたい。
- ・3 小学校の交流（小小連携）をすることで「将来の同級生」の出会いも考えられる。
- ・今後、除草作業、ボランティア活動などを計画して、豊かな心を育てる交流をさせる必要がある。
- ・安全・管理上の課題がいくつかある。休日の行事に参加すること、放課後の活動に参加することなど、小学校にとって教師の勤務時間・子どもの安全性などの問題がある。

(要録 D 37～38 頁)

- ・交流会での中学生による合唱や英語の歌の披露に小学生が感動している。
- ・小学生は中学校の運動会での招待リレーへの積極的な参加など、中学校の行事への参加意欲が高く、体験的な活動を望んでいることがわかる。

- ・休日の合同の行事は、引率する小学校教師の勤務や子どもの移動の安全確保などの面で困難な点があり、今後、連携のための条件の整備が求められる。
- ・中学校は今後、除草作業、ボランティア活動なども連携活動として考えているが、まずは楽しい体験をして中学校への期待感を高めることが重要なので、イベント的な活動の方がよいと思える。

#### IV まとめ

E市教育委員会は、本事業について以下のような総括をしている。国語科の「読むこと」「話すこと・聞くこと」の領域や、道徳の「主として他の人とのかかわりに関すること」の視点について9年間を見据えた系統表が作られた。アンケートや協議が積み重ねられ、カリキュラム作成に大きな効力をもたらした。公開授業での学習指導案や研究の実際に、多様な取り組みがまとめられた。(要録D 教育委員会あいさつ)

このように連携の意義や成果について述べられているが、ここではカリキュラム、指導方法、交流活動の観点から、より具体的に掘り下げてまとめたい。

##### ○カリキュラム

- ・国語の「聞く・話す」と「読む」の分野、および道徳教育において小中の系統表が作られていた。このような系統表によって学年の重点が把握でき、取り組みの位置づけや手立ての意義が明確になることがわかった。
- ・C小学校では英語好きの児童を育てるために、独自に小学校低学年から中学校までの、主なトピック、言語材料、目標を設定した一覧表を作成している。
- ・上記のような系統表、一覧表に示された明示的なカリキュラムの他にも、例えば、音楽科で小学校において押さえておくべき点が確認され、美術科で小学生はアイデアをたくさん出すことが大切で、そうすると中学校で広い見方、考え方ができる、といった、それぞれの発達段階において大切な学習内容の提案があった。家庭科でも小学校でしっかり身につけさせておきたいこと、中学校に任せてもらいたいことについて、具体的な内容が出ていた。このような指摘は現実的なカリキュラム構成を考える上で参考になる。具体レベルで、実際の活動を想定しつつ、連携にかかわる学習内容について考えていく

ことが重要である。

- ・理科では学習内容を先取りすることによる「学ぶ時の新鮮さや驚きをなくす危険性」が指摘されていたが、この指摘は、交流活動の際、陥りやすい問題を端的に示している。単に内容を先取りするのではなく、しかるべき時まで「待つ」こともカリキュラム上の重要な配慮である。
- ・総合的な学習は、それぞれの学校の課題や子どもの実態に応じて設定されるので、内容面で小中を系統的に関連させるのは困難であった。そのような中、キャリア教育という共通点を見つけて合同授業を行うなど、工夫がみられた。ただ、総合的な学習は学習内容よりも、どのような学習方法を身に付けているのか、その学習方法をどのように発展させるのか、といった学習方法の面での連携を考えていくことも可能だと思われる。

#### ○指導方法

- ・小学校の授業に関して、子どもが意見交換を十分に行っていることや主体的な思考を行っていたことがよさとしてあげられ、国語や道徳、学級活動などで中学校の教師が、小学校の授業を取り入れようとしていた。これは、現在、提唱されているアクティブ・ラーニング（主体的・相互的で深い学び）に近いものであり、中学校はこのような指導法を小学校にもっと学ぶ必要がある。
- ・中学校のよさとして深い教材研究や専門的な指導性があげられていた。特に音楽科や美術科では中学校教師の高度な指導力に小学校の教師が学んでいた。
- ・美術科では小学校の教師が一旦、中学校の教師に学んで、その内容を児童に指導するなど、通常の教員研修としても意義があった。これは、教員の10年研修などでも取り入れることができよう。
- ・音楽科での合唱のレベルの向上など、短い期間でも、顕著な成果が見られたケースがあり、特に技能系の教科の連携上の意義が示された。
- ・理科の実験でも、倍率のよい顕微鏡の活用など、中学校の設備・施設のよさが生かされていた。
- ・理科や体育などでは中学生がアシスタント・ティーチャー的な活動をしていたが、これは小学生、中学生の社会性の育成につながったと思われる。

- ・家庭科では中学校での「評価」方法が具体的に示されていたが、これも小学生にとって、中学校への進学不安を軽減することにつながったと思われる。

### ○交流活動

- ・音楽科や美術では、最初の教師間の交流会において教師が悩みや課題を素直に出して共有するところから、必然性のある活動が発生していた。このように、教育の課題を相互に共有することが連携活動において非常に重要であることがわかった。
- ・英語劇や職業体験発表会など、小中学生の交流活動が様々な形でなされているが、これは中学生にとっては指導・援助すべき対象、小学生にとっては目指すべき対象の出現であり、様々な教育効果があった。
- ・美術科では、児童生徒の直接の交流はないが、作品や感想の交流など、状況に応じた取り組みができていた。この間接的な交流も、時間や場所の制約の多い現実の中では意義がある。
- ・小学生は中学校の行事への参加意欲が高かったが、休日の引率の問題など、教師の勤務条件も考慮する必要がある。

西南学院大学人間科学部児童教育学科